



親不知海岸スタート前日 7/16

スタートは 2002 年の 7/17 日だった。  
 親不知ホテルを朝の 6 時頃雷鳴響く豪雨の中の出発であった。  
 ホテル前にある梅海新道登山口がスタート地点である。  
 地元「さわがに山岳会」の苦勞によって切り開かれた梅海新道は  
 自身にとっても初めてであり、楽しみのコースでもあったのだ。  
 前の晩にリュックの重さをヘルスメーターで量ると  
 31.6kg の重さがあった。テント泊で 10 日分の食料を  
 詰め込むとどうしても 30kg は超えてしまう  
 計画では 36 日後に富士山頂上、38 日目に静岡県田子の浦海岸  
 まで歩いて担がなければならない  
 この海拔 0m 地点から朝日岳 (2418) まで当初は  
 2 日間で駆け抜ける予定であったが、梅雨空の湿度高い  
 樹林帯の登山は疲労困憊の 3 日間になってしまった。  
 高山植物の綺麗なお花が咲き乱れる時期でもあったが  
 雨の中の登山では楽しむ余裕も無かった。  
 スタートから 3 日間で出会った人は 1 名のみ  
 白鳥小屋 (無人小屋) ではツキノワグマにも遭遇した。



マムシも非常に多かった。蒸し暑い中、北俣の水場で短パンになって水を汲みに行くと糠蚊の襲撃にやられてしまい両太股を赤く腫らしてしまった。

刺されると猛烈に痒い

今でも仙人温泉小屋の小屋開け時の作業は糠蚊に悩まされ、この時の事を良く思い出す。

朝日岳は予定よりも1日遅れで疲労困憊の中到着。テント泊をやめて朝日小屋に泊めさせてもらった。当初の予定では下界以外の山域は全てテント泊の予定であったが、スタート3日目にして早くも当初のプランを断念して小屋泊まりをしてしまった。



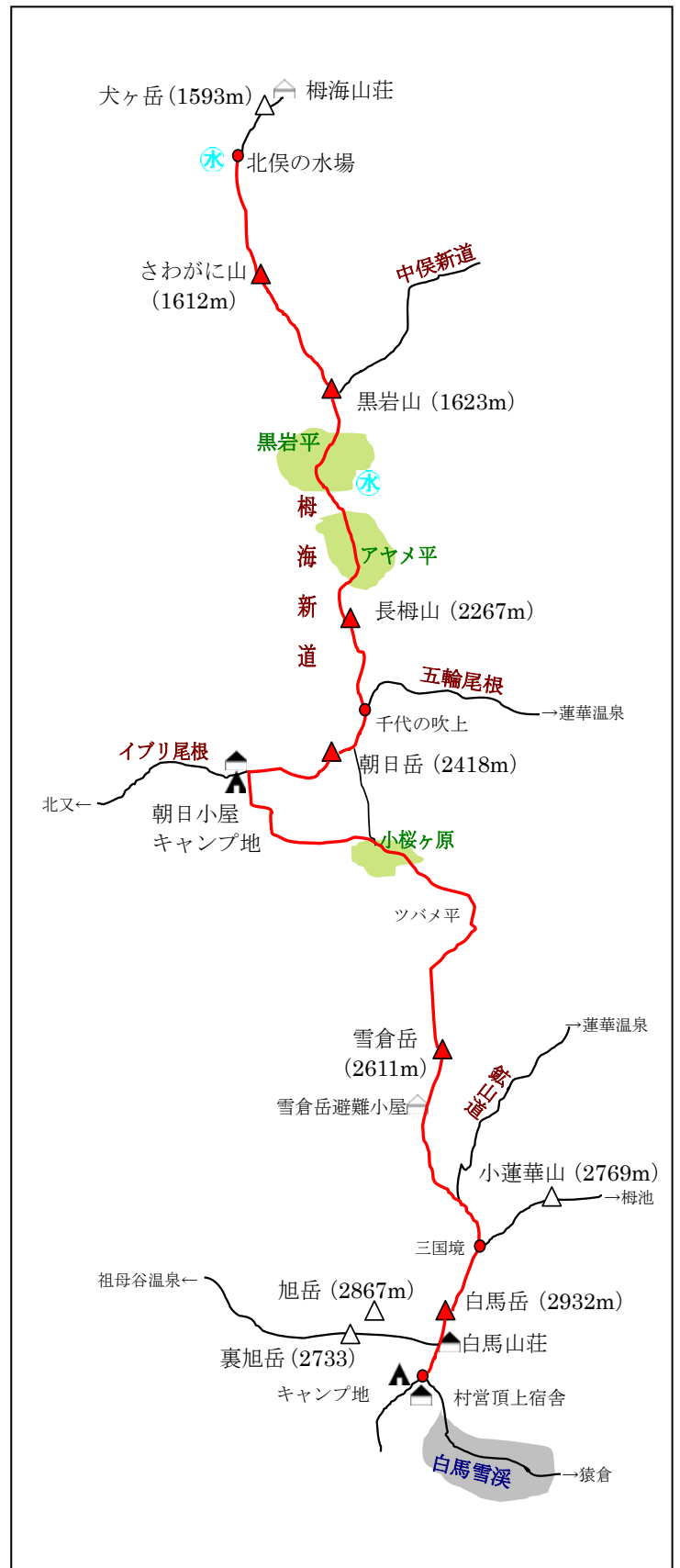
しかし、ゆかりさんで有名な朝日小屋の温かい御もてなしに感動したのを今でもはっきりと覚えている。美味しい食事とふかふかのお布団での熟睡ある程度の疲労回復も出来た。

その時、無職となった自分は登山者にとって癒しとなる山小屋で働いてみたいと思ったものである。

ゆかりさんの小屋番日記は欠かさず見ていたので大変さは理解しているつもりでもあったが

仙人温泉小屋のスタッフとなった今では、小屋の仕事に憧れと希望に満ちて、お手伝いを始めても長続きはしないと、はっきりと言える。

宿泊者にとっては準備が整った状態での小屋に憧れを持って、それまでの苦労は見えない山小屋の仕事ほど理想と現実から掛け離れた仕事は無いと思う

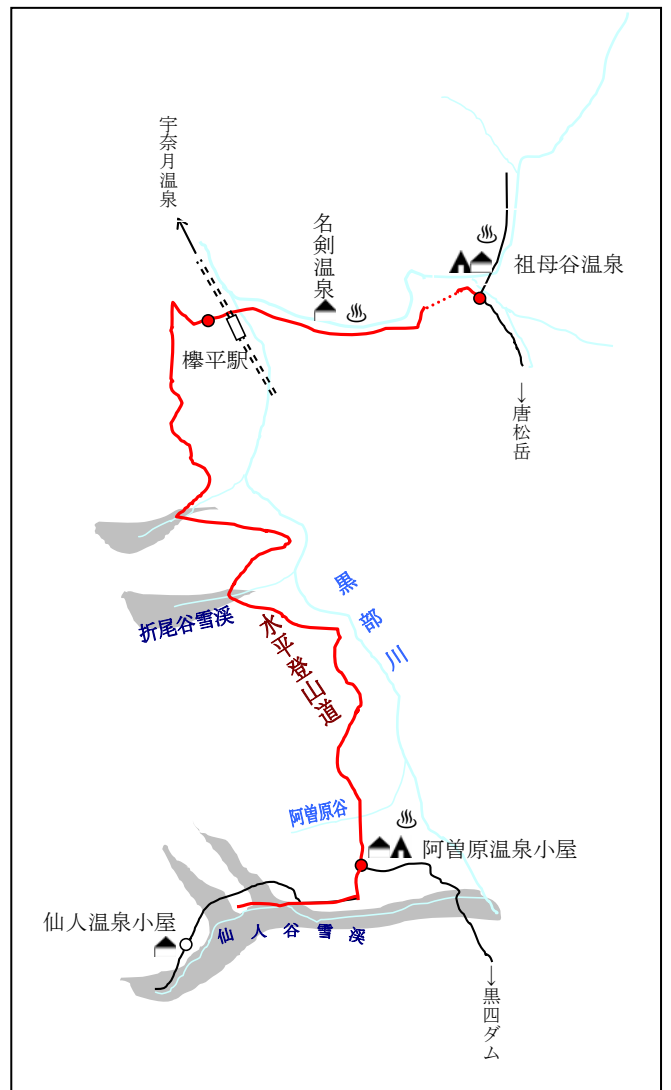
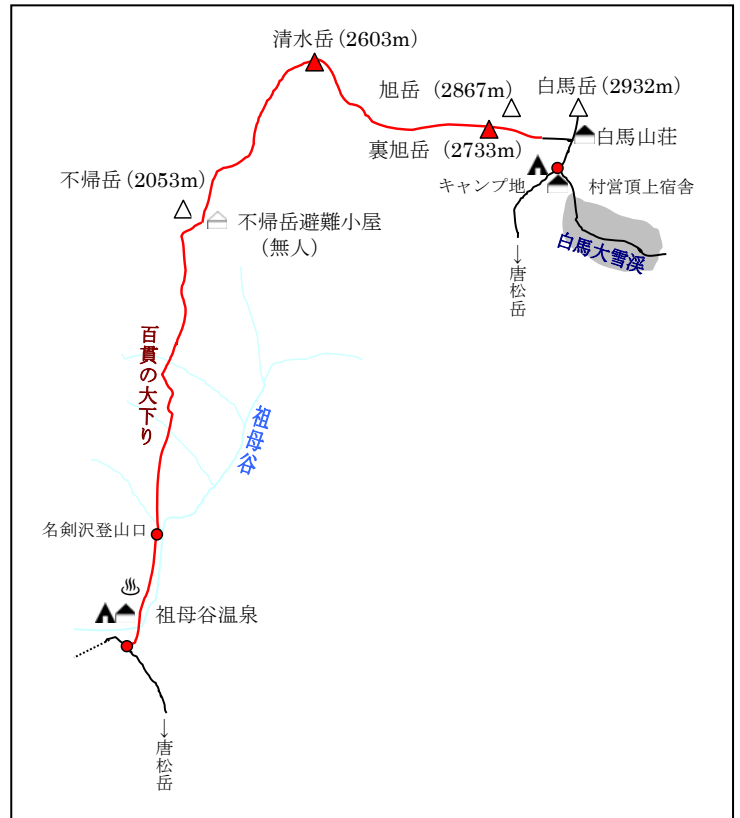


さて、朝日小屋からの白馬岳までのコースは  
 天気悪かったのだが梅海新道と比べて登山者も  
 多く気分的に楽であった。

白馬岳からの長い下りの登山道は 30kg のリュックが  
 重くのしかかり、百貫の大下りでは下半身が  
 かなり参ってしまった。祖母谷温泉へ着き、  
 五日振りのお風呂に入り洗濯に終始した。



温めと熱めの湯船に分かれていた露天風呂は快適だった。  
 テント場から気軽に入れる露天風呂にも感激した。  
 ここからの初めて歩くコースは黒部溪谷の水平道と  
 阿曾原温泉小屋に仙人温泉小屋と温泉が続く  
 仙人峠までの裏剣は当初は舐めていた。  
 その先に続く剣沢大雪渓を心配していたのだった。  
 樺平からの初めて歩く黒部溪谷の水平道は  
 梅雨の雨の中では辛いものがあった。







約 75 年前に作られた黒部川の水平道は小説「高熱隧道」で有名な旧日電歩道でもある。この道のりを人夫が 50kg のセメント袋を担ぎ仙人ダム建設の為に運んだと書いてあった。当時の人夫と比べれば

自身の 30kg のリュック等は楽なものである。

岩盤をコの字型に切り抜いた登山道は阿曾原温泉小屋まで 13.6km も続く、岩盤を伝った雨水が歩行者に直接降りかかり初めて歩く自分にとっては辛かった。

阿曾原温泉小屋に着いたのは昼頃だったと思う。

小屋の御主人の佐々木さんから、この先の阿曾原峠からの雪溪の注意点を優しく教えてもらった。

持っている地図に雪溪の取り付け部分と

仙人温泉小屋へ続く登山道を記入して下さった。

今でも、その時の地図は大事に持っている。

しかし、結果として仙人谷雪溪を歩いている時にガスに巻かれてホワイトアウトの状態になってしまったのだった。

初めての仙人谷雪溪で所々シュルンドが開いている中のホワイトアウトは非常に恐怖感を感じた。

たまたま、その近くの雪溪の淵に見えた大きな岩の上にテントを張れるスペースを見つけ、躊躇無く

そこにテント泊する事を決めたのだった。

仙人温泉小屋のスタッフとなった今では、小屋からそんなに離れていないこのポイントで良くテント泊したものだともつくづく思う。初めての仙人谷での真っ暗な夜は不気味だった。

遠くから誰かが笛を吹いているような音色が聞こえてきた。

「ピーー... ピーィン」、段々近づいて来て大きくなりテントの周りで聞こえるようになった誰かが遭難者の捜索で笛でも吹いているのだろうか？

外へランプで照らしても姿が見えない、その時は正体が分からなかった。



初夏の仙人谷雪溪

翌日高橋さんが笛の音色の正体を明かして下さった

その時の会話である

「あれはニホンジカの親子だよ。」

「ニホンジカは夜行性だからね。お母さん鹿がその年に生まれた仔鹿を連れて餌を求めて歩き回っているんだ。」

「低い鳴き声のピーって言うのがお母さん鹿で、ピィ〜んって高い声が仔鹿なんだ」

「あれは後ろから付いて来る仔鹿に早く来なさいって言ってるんだな。」

「仔鹿も迷子にならないように後ろから鳴きながら必死に付いているわけだ」

「これがね秋になるとね。お母さん鹿は後ろから付いて来る仔鹿をぶるぶるって追い払うんだよ。

親離れの季節なんだな。」

「仔鹿はより高い声で鳴きながら必死でお母さん鹿に付いて来るんだけど突き放されるんだ」

「山で一人、仔鹿が追い払われて泣いてるような鳴き声聞いていると可愛そうで涙が出てくるんだ。」

今でもはっきりと覚えている教えて下さった内容である

お陰で春から夏にかけて仙人谷以外の森の中でもニホンジカの鳴き声は遠くからでも直ぐにわかるようになった。